

## 拡大する《中国世界》 —媽祖信仰というカギで解いてみると……—

樋泉克夫

### はじめに

華僑は血縁（同族）、地縁（同郷。同一方言）、業縁（同業）の「三縁」を相互扶助の紐帯として、ことば・風俗習慣・信仰・たべものなどの異なる環境である異境、いいかえるなら異文化に囲まれながら日々の生活を送る。この他、神縁（同一民間土俗信仰）、物縁（同一物産）もまた、彼らが異境において生き抜くためにはなくてはならない縁だといえる。異境における相互扶助の紐帯である血縁、地縁、業縁、神縁、物縁を一括りにして「五縁」と呼ぶ。

本小論では五縁の1つである神縁に焦点を当て、宋代に福建の漁村で生まれた媽祖信仰を一例に、媽祖信仰が空間的にどのように拡大し、時間的にどのような経緯をたどって現在に至ったのかを跡付けると同時に、それが現在ではどのような役割を果たしているのかを検証してみたいと思う。この作業は、とりもなおさず媽祖信仰を縁とする人々の空間的・時間的広がりを見直し、再確認することにつながるはずだ。

### 1 媽祖信仰の発生と伝播

媽祖信仰誕生については様々な説話が残されているが、たとえば明代に著わされたと伝えられる「天妃顯聖録」には、次のように記されている。

時は宋の太祖建隆元（960）年春3月のある日の夕刻、所は福建の海浜に位置する莆田県にある林家の一隅。そこに紅色の光が射しこむや、部屋は急に明るくなり、女の子が生まれた。男子と思ひ込んでいた両親は落胆したものの、とても慈しんだ。娘は幼時、泣くことがなかったことから、「黙」の一字を添えて林黙娘と名づけられることになる。彼女は同世代の女の子とは違い、とても聡明であり、8歳の時に私塾で学び古典を理解し、10歳ほどで仏教を学び仏の道を体得しちという。13歳である道師から道教の秘法を授かり、16歳で井戸から呪いの符をえて、ついに邪を除き、世の中を救う靈力を身につけ、雲に駕大海原を渡ることができるようになった。さらに海洋の気象や海難事故を予知する能力を身につけ、多くの人々を海難事故から救ったことで、誰もが「通賢靈女」と呼び崇めるようになる。だが、雍熙四（987）年の9月9日に人知れず仙化してしまった。そこで周辺の人々が莆田県の沖合に浮かぶ湄洲島に廟を建立し、彼女を祀ると共に海の安全を祈願することとなったのである。

やがて靈権あらたかなることが四方八方に伝わり、信徒の数も増す。この話が朝廷に達したことから宋の徽宗は、宣和四（1122）年、彼女の靈に「寧海鎮墩神神女祠」を下賜している。以後、元では文宗が天歴二（1329）年に彼女を「天妃」に奉じ、明代に朝廷は彼女の子孫といわれる人々に報奨を与えている。彼女が——正確にいうなら彼女の靈が天子たる皇帝から認められたことで、信仰は地域的にも広がりを見せるようになり、各地に彼女を祀る廟が建立されることになる。いま、『1995年 澳門媽祖信仰歷史文化検討會論文集』に拠って、廟が建立された主な地点を時間の経過にしたがって追ってみると、次のようになる。なお廟の名称は異なるが、本尊は全て媽祖である。また、●は中国本土、○は台湾、◎はそれ以外の地点をしめす。

- 湄洲島・天妃廟＝宋天聖年間（1022年から31年）
- 山東省登州・天后聖母廟＝宋崇寧年間（1102年から06年）
- 山東省長島県廟島・顕応宮＝宋宣和四（1122）年
- 浙江省寧波・天后宮＝宋紹熙二（1191）年
- 福建省泉州・聖妃宮＝宋慶元二年（1196）年
- 浙江省杭州・聖妃廟＝宋開禧年間（1205年から07年）
- 江蘇省鎮江・恵妃廟＝宋嘉熙二（1238）年
- 広東省広州・聖妃廟＝宋嘉熙四（1240）年
- 江蘇省上海・聖妃廟＝宋咸淳七（1271）年
- ◎香港／南宋咸淳十（1274）年。林氏夫人廟（宋代）／天妃廟（元代）／聖妃廟（明代）  
／天后廟（清代）／現在、50から60カ所の末廟あり
- 元至元十八（1281）年：澎湖島に娘媽宮を建設
- 江蘇省太倉劉家港・天妃宮＝元至元二十三（1286）年
- 天津・天后宮＝元泰定三（1326）年
- ◎沖縄／下天妃宮＝明永楽二十二（1424）年
- ◎マカオ／媽祖閣＝明弘治元（1488）年
- 明嘉靖四十二（1563）年：娘媽宮を拡充
- ◎マレーシアのマラッカ／青雲亭＝明隆慶元（1567）年
- ◎フィリピンのルソン島南部 Taal Batangas／天上聖母廟
- ◎長崎／興福寺（通称「南京寺」＝1623年、泉州寺（別名「漳州寺」）＝1628年、崇福寺（一名「福州寺」）＝1628年。共に仏教寺院だが、境内に媽祖を持つ。当時は明清交替時期。1616年に後金（1636年に大清と改める）建国、1644年に明滅亡。
- ◎インドネシアのジャカルタ／金徳院＝1650年前後
- ◎ベトナムの会安（ホイアン）・天后廟＝清乾隆六（1741）年の記録に「明後期に各省の船長が創建」
- 清順治十八（1661）年：台湾での最初の天后宮を彰化鹿港に建立

- 清康熙元（1662）年：鹿耳門（現在の台南安南区）に媽祖廟を建設
- 遼寧省錦州＝清雍正三（1725）年
- ◎シンガポール・恒山亭＝清道光八（1828）年
- 山東蓬萊県蓬萊斯閣・天后宮＝清道光十七（1837）年
- ◎ミャンマーのヤンゴン／慶福宮＝清咸豊十一（1861）年
- 山東省烟台・天后宮＝清光緒十（1884）年
- ◎タイのバンコク／順興宮＝清同治十（1871）年

以上から媽祖を祀る廟宇の建立は湄洲島で始まり、先ず海岸線を北上して山東省に。浙江、福建、江蘇、広東と続き、13世紀後半に相前後して香港と台湾海峡に浮かぶ澎湖島に。再び天津まで北上した後に南下。沖縄、マカオ、マレー半島、フィリピンのルソン島、長崎、ジャカルタ、ホイアン、台湾本島へ。次に長駆北上して中国本土から東北への入口に位置する遼寧の錦州へ。渤海を南渡して山東を経てヤンゴン、さらにバンコクへと続くことになる。もちろん、廟宇が以上の順序で整然と行なわれたわけではなく、各地で進められていたに違いない。だが、少なくとも最初の廟宇建立が時代的にも特定できるのが、ここに挙げた地点である。以上を敷衍するなら、湄洲島に天妃廟が建立された宋の天聖年間からバンコクの順興宮建立の清同治十年までの850年ほどの間に、媽祖信仰は遼寧省錦州を北、ミャンマーのヤンゴンを西、インドネシアのジャカルタを南、長崎を東の端とする広い範囲に広がっていったことが判るだろう。ならば信仰の輪は、中国東部沿海を三日月形に遼寧省から広東省へと繋がり、台湾を加え、これを西からミャンマー、タイ、マレーシア、インドネシア、ベトナム、フィリピン、日本と包むように広がっているといえそうだ。

じつは現在、上記の国々に加え、カンボジア、ラオス、さらに朝鮮半島、インド、フランス、デンマーク、アメリカ、ブラジル、アルゼンチンなどにあるチャイナタウンでも媽祖が建立され、媽祖信仰の伝播が認められるのである。ということは、やや大げさに表現するなら、媽祖信仰は地球規模で拡大しているということだろう。

タイで発行されている華字紙の「亜洲日報」（2000年3月29日付け）によれば、全世界に広がる媽祖信徒は約2億人を数え、台湾では人口の75%以上が信徒であり、湄洲島の天妃廟から枝分かれした媽祖廟分社は世界中で4千社を超える。1992年、中国政府が同島を全面開放したことで、湄洲島の天妃廟世界の媽祖信徒にとっての「聖地」となった——とのことだ。

## 2 媽祖信仰伝播の原因

では、なにゆえに、このような形で媽祖が伝播したのだろうか。この問題を考える前提として、宋代に発達した航海術と移動・定住を繰り返しながらも「五縁」に象徴され

る移動元の生活文化を維持しようとする漢民族の生き方をみておく必要があるようだ。

まず航海術についてだが、宋代は大型外洋船の建造が可能となり羅針盤が発明されたことで、それまでの時代と様相を異にする。つまり大量の荷物を遠方まで正確・安全に運べるようになったのだ。次いで生活文化についてみると、「五縁」はそれを共有する集団の相互扶助の紐帯だったのである。

第2次大戦前、中国の社会構造を現地調査した仁井田陞は、その成果の一端を綴った『中国の社会とギルト』（岩波書店 1995年）において、中国社会の内面構造を次のように綴っている。

中国社会をその内面構造の上からとらえてみれば、同族（血縁）や、同郷（地縁）や、同学（学縁）や、同教（教縁）や、同業（業縁）や、又、血縁の擬制というべき親分、子分、兄弟分関係の緒結合など、大小いくつもの、又、幾種もの社会集団が重なり合っているのであって、人はそのうちの一つに限らず、そのいくつにも関係をもってきた。人は生きて行くために、よりよくその生命と財産とを守るために、血縁のような自然的結合関係にたよるのは勿論のこと、人為的な結合関係をもできるだけ作って、つとめてこれをたよりにしようとする。

つまり中国においては、「人は生きて行くために、よりよくその生命と財産とを守るために、血縁のような自然的結合関係にたよるのは勿論のこと、人為的な結合関係をもできるだけ作って、つとめてこれをたよりにしようとする」わけだが、これを別の視点で考えるなら、そうしないかぎり、中国においては、「人は生きて行く」ことも、「よりよくその生命と財産とを守る」ことも困難になるということだろう。

長い中国の歴史を俯瞰してみると、王朝の交替とそれに伴う戦乱、自然災害、人口爆発など、社会を混乱させる要因は常に存在した。たとえば新王朝に倒された前王朝の王族や遺臣は王都を逐われ、自然災害によって生きる全てを失った農民はそれまでの生活を棄てて、人口が爆発的に増加したことによりメシが食えなくなった庶民は流民となって、新しい生存空間を求めて広い大陸で移動・定住・再移動を繰り返してきた。これこそが漢民族が生まれながらに背負うこととなった性質の一端といえるはずだ。

宋代以降にみられるようになった東南アジア各地の港市への移動、あるいは18世紀末以降の西欧植民地勢力の本格的な植民地開発に伴って華工と呼ばれた大量の無資本労働者の海外への移動になって初めて華僑と総称するようになったが、この華僑という現象を漢民族が新しい生存空間を求めて移動を繰り返す人の流れの一貫として捉え直すなら、華僑は中国世界の外、あるいは中華帝国の版図外ともいえる海外において初めてみられるのではなく、中華帝国の内側で繰り返されてきた移動・定住のサイクルが、ある時点から中華帝国外に飛びだしていった現象と見做すべきではなかろうか。

たとえば陳碧笙は華僑問題を「中華民族の海外での大移動」と捉え、『世界華僑華人簡

史』で次のように説いている。

歴史的にも現状からも、華僑問題の実質はつまり中華民族の海外における大移動にある。北から南へ、大陸から海洋へ、経済水準の低い地域から高い地域への移動は、南宋時代から現在までと止まることなく続き、しかも一代また一代と時代を下るごとに多く なる。この移動は、将来にわたっても中断することなく続くであろう。

ここで陳は華僑という現象の一半、いわば海外での移動にしか言及していないが、「華僑問題の実質」を捉えようとするなら、やはり「華僑問題の実質は」「中華民族の海外における大移動」のみにあるのではなく、漢民族は「海外における大移動」以前に中国の内部でも「大移動」を繰り返していたことを認めるべきだろう。

つまり中国社会が仁井田が捉えたような「内面構造」を持つ理由は、漢民族は「大移動」を繰り返すからなのだ。中国の内と外とを問わず、「人は生きて行くために、よりよくその生命と財産とを守るために、血縁のような自然的結合関係にたよるのは勿論のこと、人為的な結合関係をもできるだけ作って、つとめてこれをたよりにしよう」としてきた。これをいいかえるなら、仁井田が捉えたような「内面構造」を持てばこそ、漢民族は中国内外における「大移動」が可能となったのだ。じつは神縁は、次に挙げる2つの相互扶助の機能を持って「内面構造」の一角を形成してきたというわけだ。

一つは移動先での団結力の中心である。土俗信仰、いいかえるなら祖籍神の信仰を同じくすることで故郷（方言）を同じくする人々の団結の象徴となり、移住者集団の結びつきを強め、移動先での種々の困難に対応できる。台湾の農村部に顕著にみられるように、この団結が後に集落、村落へと発展していくことになる。

残る一つは械闘発生の際、同郷集団を糾合・団結させ他の宗族に対する武装集団となり自己防衛の機能を持つ。械闘とは中国南部の農村地帯に顕著にみられる。水争いなどを原因として農民相互が徒党を組み武器を持って戦う現象を指すが、清朝中期以降の台湾をみると、明らかに信仰する祖籍神の違う移住者集団の間で械闘が繰り返されている。乾隆三十三（1768）年から光緒十三（1887）年の120年間、平均2年に1回の割合で械闘が発生している（計57件）。械闘の頻発は、神縁による紐帯の強さの傍証ともいえるだろう。

### 3 媽祖信仰の現在

涓洲島に天妃廟が建立された宋の天聖年間以降、媽祖を信仰する集団が「大移動」を繰り返してきた。いいかるなら、先に挙げた北は遼寧省錦州、西はミャンマーのヤンゴン、南はインドネシアのジャカルタ、東は長崎を結ぶ広大な広がり、媽祖信徒による「大移動」の足跡ということになる。

この「大移動」は、1949年の中華人民共和国の成立によって一旦は停止となった。というのも、中国政府の「竹のカーテン」によって、中国人の国内外の移動を原則禁止すると同時に、海外在住華僑の国内への移動を禁止したからである。この措置によって、当然のように媽祖信徒による内外の交流も途絶えることとなった。だが、1978年12月の中国共産党第11期3中全会における決議によって対外開放政策に踏み切るや、この交流が再開することとなったのだ。そこで媽祖信仰という神縁にかかわる主立った動きを、中台兩岸関係を軸に追ってみると：

- 87年10月 台湾政府、一般国民の大陸探親旅行開放を決定（翌月から開始）。
- 88年5月 台湾の信徒の一部（220人）が台湾政府の禁止措置を無視し、船で湄洲島の媽祖廟本山＝湄洲島天妃宮を参詣。
- 90年代初 インドネシアの華人系企業家が湄洲島の総合開発を発表し着工。
- 97年1月 湄洲島天妃宮に祀られる国宝指定の媽祖の御神体が台湾を巡行（100日。35の分社。台湾の1千万人以上の信徒が歓迎）。
- 97年6月 新華社、「中国政府、2005年の完成を目指し、湄洲湾で国際港湾都市を建設中」と報ずる。
- 97年8月 厦門から中国入国の台湾住民に対し、ビザを免除。
- 99年11月 「福建僑報」が「近い将来、湄洲湾が外国船舶に開放される」と報道。
- 00年3月 タイの「亜洲日報」（華字紙）は「1992年、中国政府が湄洲島を全面開放するや、同島は全世界の媽祖信徒にとっての”聖地”となった」と報道。
- 00年4月 南京軍区を視察した中国の国防相は、「南京軍区の前線慰問チームの演じる大型劇『媽祖』を、軍幹部とともに観賞し、台湾海峡の兩岸で信仰を集める媽祖廟を題材に民族の一体性を訴えた政治的プログラムであり、国防相は『媽祖文化は世界の華人が信仰する精神的な共通点だ』と統一論を念頭に感想を語った」（「産経新聞」4月16日）
- 00年4月 第3回福建省湄洲国際媽祖文化節（4月17日から5月6日まで。媽祖廟本山で。台湾、マカオ、天津などから参加）。
- 01年1月 台湾政府の「小三通」政策実施により、台湾側の金門、馬祖島より対岸の厦門などを訪問。一行は湄洲島の媽祖廟（総本山）を参詣。
- 01年5月 台湾の陳水扁総統、兩岸関係に関する台湾の「五不政策」と「新五政策」を発表。その中で、「小三通」は台湾と中国大陸との将来の「大三通」の前触れとみなされるだけでなく、兩岸の対話を促進するものとしている。
- 06年4月 台湾の媽祖信徒500人余、台湾の媽祖の中心である彰化南瑤宮に祀られている媽祖の分霊を持ってバンコクを訪問。同地在住14万台湾系住民が歓迎。同地に台湾系媽祖廟宇建立の他、媽祖病院建設をも計画。
- 06年6月 台湾と金門＝泉州間直航航路営業開始。
- 06年9月 台湾の媽祖信徒4300人、金門より直航航路にて厦門経由で湄洲島本山へ。

ここにみえる「三通」とは、台湾に対する中国側の呼び掛けであり、中台兩岸の間で「通商、通航、通信（＝通郵）」を自由に進めようというもの。地域を限定せず全面的に三通を進めようというのが「大三通」、台湾側は金門・馬祖地区に中国側は福建省に交流を限るのを「小三通」と呼ぶ。

現在の中台兩岸関係が政治的に緊張したものであることは周知のことだが、87年から06年9月までの兩岸関係を媽祖信仰という神縁を軸にみると、両者は漸進的に結びついていることが判るはずだ。現実の政治とは別の次元で、表立ってはいないものの着実に進んでいる中台兩岸の結びつきを知るにつけ、台湾海峡を挟んでの漢民族社会に共通する神縁の働きを実感しないわけにはいかないだろう。

### むすびにかえて

80年代末に中国が踏み切った対外開放政策が現在の中国の経済発展を導いたことは否定しようのない事実であり、それゆえに対外開放政策を経済問題として論ずることが一般的だ。だが、本小論でみてきたように、じつは対外開放政策が中華人民共和国とその周辺に分離されていた内外の漢民族系社会を、政治という国境を超え、漢民族が持つ「五縁」を軸に再交流を促した点を忘れてはならないだろう。「五縁」のみならず、生活文化面での交流は、これからさらに進むことが容易に予想される。

であればこそ媽祖信仰という神縁の過去と現在から、未来を予想するなら、そこに新しい形の《中国世界》の拡大の姿を認めることができそうだ。

### 参考文献

#### ■日本語

- ・仁井田陞『中国の社会とギルト』岩波書店 1995年
- ・可児弘明・斯波義信・游仲勲編『華僑・華人事典』弘文堂 平成14年

#### ■中国語

- ・《華僑華人百科全書・僑郷卷》編輯委員会『華僑華人百科全書・僑郷卷』新華書店 2001年
- ・徐曉望・陳衍徳『澳門媽祖文化研究』澳門基金会出版 1998年
- ・徐曉望『媽祖的子民 閩台海洋文化研究』学林出版社 1999年
- ・張珣『文化媽祖 台湾媽祖信仰研究論文集』中央研究院民族学研究所 中華民國92年
- ・藍達居『喧鬧的海市 閩東南港市興衰与海洋人文』江西高校出版社 1999年
- ・林美容『媽祖信仰与漢人社会』黒龍江人民出版社 2003年

- ・林祖良編撰『媽祖』福建教育出版社 1989年
- ・劉月蓮・黄曉峰執行編輯『1995年 澳門媽祖信仰歷史文化檢討會論文集』澳門文化研究会・澳門海事博物館 1998年
- ・呂淑梅『陸島網絡 台灣海港的興起』江西高校出版社 1999年
- ・楊国楨『閩在海中 追尋福建海洋發展史』江西高校出版社 1998年

## 著者プロフィール

**樋泉克夫 (HIIZUMI Katsuo) 国際文化研究科・外国語学部（中国学科）教授 華僑・華人論、京劇史**

### ■略歴

1947年生まれ。中央大学法学部、香港中文大学新亜研究所、中央大学大学院博士前期・後期（東洋史学専攻）で学ぶ。1983年から1992年の間の2回計7年間ほど、在タイ日本大使館専門調査員。その後、財団法人国際開発センターを経て1997年より愛知県立大学へ。

### ■これまでの研究活動

興味に任せて研究を進めています。とはいえ軸は華僑・華人と京劇。これまで出版した単行本は1992年の『華僑コネクション』（新潮選書）が最初で、以後『華僑の挑戦』（Japan Times）、『京劇と中国人』（新潮選書）、『中国の宿命』（碧天舎）、『大中華ビジネスが行く』（WEDGE）、『華僑烈々』（新潮社）など。

### ■これからの研究

①中華人民共和国が改革・開放に踏み切って以降、香港、台湾、マカオはもちろんのこと東南アジアの華僑・華人社会は劇的な変容を遂げつつあります。この地域を足で歩いて現状を捉えると共に、それを歴史と対比することで、将来の《中国世界》の姿を構想すること。最近は主にミャンマー東北部を歩いています。ラオス、北タイ、東北タイ、カンボジア行きは暫く休んでいますが、今夏辺りから再開の予定です。

②京劇については、毛沢東という稀代の戯迷（芝居狂い）の人生を彼の革命家・政治家生活に重ね合わせながら追いかけることで、新しい毛沢東像を描き出すことが出来るのではなかろうかと考えています。

③清朝時代の北京を大きな芝居小屋と捉え、そのなかで芝居がどのように演じられ、社会生活の中でそのような位置を占めていたのかを考えているところ。芝居に関連する法律、禁演政策に対する役者や庶民側の対策、芝居小屋の構造、役者養成システムなどを総合的に見直しているところです。

### ■「共生」について 研究所への要望

華僑・華人研究の大きなテーマの1つがホスト社会との関係、ことに同化・融合という問題です。ともすれば自己の文化（生き方、生きる形、生きていくための仕組み）を守り通しがちな華僑・華人にとって、異文化社会を如何に生き抜くかは彼らが抱え続けねばならない永遠の難題であったわけです。そこで彼らはホスト社会に同化・融合する道を求める一方、地



縁・血縁・業縁・神縁・物縁などの「五縁」と呼ばれる彼ら独特の相互扶助システムを維持することで、異文化との折り合いを工夫してきたわけです。中国が改革・開放に踏み切ったことで多くの中国人が新しい居住空間を求めて世界各地に移動・移住を進めている現在、彼らもまた自らの文化と異文化との間の折り合いを如何に築くべきかという難題にぶつかっているはず。「共生」と同化・融合との間にどのような関係があるのかは不明ですが、華僑・華人という存在もまた「共生」を考えるうえで参考になろうかと思えます。「共生」にある定まった枠を当てはめるのではなく、より柔軟に捉えてみるべきではなかろうかと考えます。実際に東南アジアで生活し、各地を歩いて彼らに接し、多くの華僑・華人の友人と付き合っていると、ある種の枠組では捉えきれない生き方を痛感します。種々雑多な研究が共生できるような研究所の姿を求めます。



ミャンマー中部の都市マンダレーの雲南会館調査の際